

傷病鳥獣保護事業で保護されたホンダタヌキの人工哺育に関する報告とその考察

田原俊輔

(横浜市立野毛山動物園)

横浜市は、神奈川県から、ケガや病気によって保護された野生鳥獣受け入れ、治療やリハビリを経て野生復帰させる「傷病鳥獣保護事業」の委託を受け、横浜市立動物園にて傷病鳥獣を受け入れている。また、国内には、タヌキを飼育している動物園が多数あるが、人工哺育についての報告は少ない。本報告では、2024年4月から同年5月に保護され、横浜市立野毛山動物園で人工哺育されたホンダタヌキ6頭の記録を、過去の自然哺育個体群に関する報告と比較した。

対象個体は、出生後1日での保護と推測されるオス1頭(No.1)、1週齢での保護と推測されるオス1頭(No.2)、同じく1週齢での保護であり、同腹子と推測されるオス2頭(No.3、No.4)、メス2頭(No.5、No.6)とした。保護日から哺乳瓶と人工乳首(子犬・子猫用)を使用した人工哺育を行った。哺育期間中は、毎日の体重とミルク摂取量の計測を行った。計測した体重のうち、1週齢から4週齢までの体重を、過去に報告のあった自然哺育個体群の体重と比較した。その結果、各個体群間に有意な体重差は見られなかった。また、成長速度についても比較したが、有意な差は認められなかった。一方で、No.1の、保護から1週齢までの体重増加量は、自然哺育群の出生から1週齢までの体重増加量と比較して著しく少ない結果となった。以上の結果から、タヌキの人工哺育においては、出生から1週齢程度を目安に、夜間を含めた哺乳、または強制哺乳を含めた定量の哺乳が必要であると推察された。また、1週齢以降では、日中における1日数回の哺乳でエネルギー要求量を賄えることが示唆された。今後は、体重以外の測定項目を追加検討し、正常な身体発達や行動の発現について考察する必要があると考える。